

岩永竜一郎 論文内容の要旨

主論文

Characteristics of the sensory-motor, verbal and cognitive abilities of preschool boys with attention deficit/hyperactivity disorder combined type

注意欠陥/多動性障害混合型の就学前男児の感覚－運動・言語・認知能力の特性

岩永竜一郎、小澤寛樹、川崎千里、土田玲子

Psychiatry and Clinical Neurosciences, Vol.60 No.1, 2006 掲載予定

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科医療科学専攻

主任指導教員：小澤寛樹教授

緒言

注意欠陥／多動性障害(ADHD)は、小児期に発症する精神神経障害で最も多い疾患であり、年齢レベルにそぐわない多動、衝動性、不注意を主症状とする。ADHD には、多動 - 衝動型、不注意型、混合型の3つのタイプがある。その中でも特に ADHD 混合型 (ADHD-C) の児は、学齢期に社会適応障害による2次障害を引き起こしやすく、その対応に苦慮するため、彼らの就学前における発見と治療が求められている。ところが ADHD-C 児の多くは知能が正常域であることや、彼らの行動や注意の問題が健常児のものと判別が困難であることから、発見と診断が困難である。そのため、ADHD-C 児の早期発見と診断において客観的指標に基づく評価が必要である。ADHD-C 児は主症状の他に感覚－運動面や言語、認知面の問題を持っていることが多い。従って、幼児期におけるそれらの問題を明らかにして客観的指標として用いることで、早期発見と診断の精度の向上に役立てることができると考えられる。また、それらは ADHD-C 児の早期治療教育において重視すべき点を示すと考えられる。しかし、ADHD-C 児の幼児期の感覚 - 運動・言語・認知能力についての研究は不十分である。

本研究の目的は、より早期に ADHD-C を診断・治療するために ADHD-C 幼児の感覚－運動・言語・認知能力の特性を明らかにすることである。

方法

ADHD-C 幼児の感覚－運動・言語・認知能力の特性を捉えるために日本版ミラー幼児発達スクリーニング検査(JMAP)を用いた。JMAP は、感覚－運動・言語・視覚認知能力を評

価する 26 の下位項目によって構成されている。そして、これら下位項目のスコアに基づき総合点と能力領域毎の指標スコアが算出される。JMAP の能力領域の指標は、基礎的感覚－運動機能を反映する基礎能力指標、協調運動能力を反映する協応性指標、言語能力を示す言語指標、視覚認知能力を反映する非言語指標、視覚認知と運動の統合的能力を反映する複合能力指標の 5 つである。

長崎市内の療育施設に通所する 243 名の発達障害児の JMAP のデータから、45～72 ヶ月の IQ85 以上の 46 名の ADHD-C 男児の JMAP のデータを収集した。そして総合点、領域ごとのスコア、下位項目スコアについて、ADHD-C 男児の JMAP データを JMAP 標準化サンプルの中で性をマッチした 46 名の男児のデータと比較した。

## 結果

ADHD-C 群は標準化サンプル群よりも、総合点、基礎能力指標、協応性指標、言語指標、複合能力指標のスコアが有意( $p<0.01$ )に低かったが、非言語指標では両群間に有意差が見られなかった。

基礎能力指標のスコアは、48%の ADHD-C 男児が 5 パーセンタイル以下に含まれていた。この指標のスコアが 5 パーセンタイル以下である ADHD 男児の比率は、他の 4 つの指標スコアのそれよりも高かった。

下位項目毎のスコアでは、26 項目中 14 項目において、ADHD-C 男児群が有意に低かった。感覚－運動項目では「手指判別」、「片足立ち」、「線上歩行」、「背臥位屈曲」、「体軸の回旋」、「線引き」、「線上歩行」、「舌運動」、「構音」、「肢位模倣」のスコアに、言語項目では、「指示の理解」、「文章の反復」のスコアに、視覚認知項目では、「パズル」、「積み木構成」、「人物画」のスコアに有意差が見られた。従って ADHD 男児群においては、触覚識別、平衡機能、姿勢コントロール、手と舌の巧緻運動、運動企画、構音、長文の意味理解を伴う記憶、視覚構成に関する機能が低いことがわかった。とりわけ、平衡機能を反映する「片足立ち」、「線上歩行」のスコアの低下が著しかった。

その一方で、他の 12 項目のスコアには ADHD-C 男児群と標準化サンプル群の間で有意差が見られなく、ADHD-C 男児では単純なすばやい運動、単純な聴覚記憶、運動を要しない視覚認知の機能は正常範囲であった。

## 考察

ADHD-C 群は標準化サンプル群よりも基礎的感覚－運動能力が特に低かったことから、ADHD-C 男児には感覚－運動面の機能障害の評価と治療が必要であり、特に平衡機能の問題が重要であると考えられた。また、言語面、認知面の検査結果から、ADHD-C 男児は、知能が正常であっても、長文記憶と視覚構成能力の問題を評価する必要性が示唆された。

本研究結果から、これまで十分検討されていなかった幼児期の ADHD-C 児の特性が明らかになり、その早期診断・治療において重視すべき点を新たに示したと考えられる。